

「むづかしい」と「むずかしい」と
——語形確定をめぐる——

東 辻 保 和

1 「日本で共通語の母体は東京語である。」(国語学辞典—共通語の項)

「東京語」の概念は必ずしも明確でない。山の手のことばのみを東京語という場合があるからである。今は、下町ことばをも含めた東京方言と考えることとする。

この東京語と共通語との交渉をみるのに、いわゆる「ザマス」とばや、「行ッチャッタ」「シチマウ」「ソウダッタッケ」などは、今日、マス・コミュニケーションの発達もあずかつて、急速に地方に伝播されているもの、はたして共通語と言ってよいかは疑問であるうし、また下町ことば特有の音韻現象である、ヒVシの傾向や、アイVエー・オイVエーの傾向などは、到底共通語の音韻現象とは認めがたいものであろう。すなわち、共通語には、東京語を母体としつつ、なお一種の規範性が存在することを否定することができない。

規範的言語という観点からすれば、標準語が最も規範性の強い言

語であるべきはずである。しかしながら、未だ標準語の制定をみていない日本においては、現在の共通語が、将来の標準語の直接の母体たるべき地位を占めていることは、一般に認められているところである。(国語学辞典—共通語の項)

とすれば、「正しくなくても現実に通用するものは共通語の中にはいる。」(国語学辞典・同右)とは言え、(言語における正しさとは何か、については今は触れないでおく。)現実に共通語が普及されつつある過程を考慮する時、共通語としての語形確定に当たっては、十分慎重を期さねばならないと思われるのである。

例えば、清濁の問題がある。「洗濯」はセンタクかセンダクか、「神社」はジンジャかジンジャか、「憤かる」はムツカルかムズカルか、「免れる」はマヌカレルかマヌガレルか、「懺悔」はサンゲカザンゲか、などと多く、その他清濁以外にも、「微笑む」はホホエムかホオエムか、なども問題となるであろう。ただし、これらは問題点として指摘したのであって、決して今直ちに、いずれかに語形を確定すべきであるなどと言っているのではないことを付言しておく。

2

共通語普及の現状を考えれば、好むと好まざるとに関らず、東京語の語形が地方の言語生活に浸透し、ある規制力を持っていることを否定することはできない。そのために、就中、対立語形を持っている同意語の場合において、方言語形を消極的ながら一方的に排斥して、東京語の語形への統一をめざしているかのごとき現象が起り得るのである。

以下、「ムツカシイ」と「ムズカシイ」という対立語形について、上述した問題点を具体的に述べてみようと思う。

(一) 現 状

A 教科書とマスコミの場合

教科書および、新聞・雑誌・放送などのマスコミにおいては、「ムズカシイ」が圧倒的である。中でも教科書は、例外なく「ムズカシイ」である。

― 例 ―

むづかしい病気はどんなものですか。(柳田・岩淵編「新しい国語」)

ああ、決心するのはむづかしいことだ。(遠藤嘉基編「国語」)
次に新聞についてみると、管見の限りでは、一般記事ではすべて、「ムズカシイ」に統一されているようである。

― 例 ―

歩みよりはきわめてむづかしい情勢である。(朝日「36・3・3」)
「むづかしい」と「むずかしい」と

2)

むづかしい軍事統合(見出し) (京都「36・3・3」)

台本どおりには撮影がむづかしいらしい。(大阪「36・3・6」)
ただ、新聞にしろ、雑誌にしろ、執筆者名のあるものの中には、稀に「ムツカシイ」も見られる。

― 例 ―

そのアカデミックな性格が必要以上にカント哲学をむづかしいものにしてきたことも否めない。(幹) (朝日「36・3・25」)
日本語と外語との間の、翻訳のむづかしさが思われる。日本でしか通用しない地域的理由もあるうが、むづかしさもその理由の一つになっているに相違ない。(言語生活「第一一四号・戸塚文字氏」)

また、NHKアナウンサーのことばも、おおむね「ムズカシイ」に統一されているようである。

こうして、われわれの言語生活には、視聴共に、夥しく「ムズカシイ」が入ってきているのである。

B 地方の実態調査

「全国方言辞典」「分類方言辞典」(東条操編)に、同語源と考えられる次のような語が収録されている。

むづかしい(山口市)・むづける(岩手県江刺郡・宮城・山形県村山地方・岐阜県郡上部)・むづこい(四国・山口県大島)・むづい(愛媛県周桑郡石根)・むづかし(佐賀)

次に本年二月、近畿四府県に亘り、高校生を対象として実施した、調査(質問紙法による)の結果を報告する。

(質問紙) 原カードは横書き。

あなたは次のようなはなしをする時へ∨の所は①②のうち、どちらの言い方をしますか。下の①②から選んで、その記号を□に記入してください。

「今日の試験は、やさしかったかい?」

「いや、かなり①mutskashi②mutskashiだったよ。」

①いつも①・②いつも②・③大体①・④大体②・⑤どちらも同じくらいに①・②わからない □

(註) 小学校入学以後、他府県に三年以上居住したものは除いた。調査校は次の八校である。紫野高校・西京高校(以上京都市)・膳所高校(大津市)・八幡高校(近江八幡市)・大阪学芸大付属天王寺高校・旭高校(以上大阪市)・御影高校(神戸市)・明石南高校(明石市)

四府県を通じて、「ムツカシイ」を使う「頻度」が、「ムツカシイ」を使う「頻度」に比して断然高い。また、①・②・③・④は語形意識の《ゆれ》を示しているが、その中でも、「大体」mutskashiを使う⑤が最も高い。この調査地域がいずれも市街地で、比較的、ことばの交流の活潑な土地柄であること、被調査者が現に共通語教育を受けていること、また共通語へのあこがれの強いこと、こうした条件があるにもかかわらず、このような結果が出るということは、これらの地方での「ムツカシイ」の根強さを物語るものと思われる。もっとも、この調査は内省法をとったため、被調査

者が事実このように使っているかどうかは別であるが、塚原鉄雄氏の論じておられるところ(註三)、この調査にみられる④・⑤の頻度の高さから、少なくともこの地方の、この年齢層での実態として、「ムツカシイ」が優勢であるとみてよからうと思われる。また従来、「ムツカシイ」「ムズカシイ」の語形対立は、関西・関東の対立として論じられてきたところでもあり、この調査に見られる傾向は、近畿方言圏の傾向をある程度正確に反映しているのではないかと思われる。

以上によって、現代語における「ムツカシイ」と「ムズカシイ」の語形対立が、「東京語」と「上方ことば」広義の「」に典型的に現われていると推測される。なお、この推測は、国立国語研究所の調査報告(註四)によっても裏付けられるものと思われる。

(二) 近世語に見られる語形

A 近世前期(慶長から明和・安永ごろまで)

- Mutguacaxi (Mutguacaxifā, Mutguacaxū) (日葡)
- Mutguacaxij (Mutguacaxigarū, vomutguacaxiŋgozarō, Anare mutguacaxiqui yono nacaana) (ナドリゲス「日本大文典」)
- 又生きてゐること身にむつかしう (mutguacaxū) 存じて・自然身持ちになつて、外聞を失なはうとむつかしう (mutguacaxū) 存じて・それから人に奉公することがむつかしい (mutguacaxij) と聞いたれば (コリヤード「懺悔録」大塚光信氏翻刻)
- 六借(節用集・鏡頭屋本)
- 六借(節用集・易林本)

「むつかしう」と「むずかしう」と

		①	②	③	④	⑤	⑥	小計
京都	紫野	30 (32.5)	10 (11.7)	26 (25.2)	7 (11.0)	8 (16.6)	2 (3.1)	163
	西京	23	9	15	11	19	3	
滋賀	膳所	32 (41.4)	3 (6.6)	23 (23.2)	10 (8.8)	18 (17.7)	4 (2.2)	181
	八幡	43	9	19	6	14	0	
大阪	天王寺	20 (31.4)	4 (8.8)	24 (28.3)	7 (10.6)	14 (16.4)	3 (5.0)	159
	旭	30	10	21	9	12	5	
兵庫	御影	28 (40.3)	16 (13.2)	9 (16.4)	10 (7.5)	11 (16.4)	1 (6.3)	159
	明石南	36	5	17	2	15	9	
総計		242	66	154	62	111	27	662
	%	36.6	10.0	23.3	9.4	16.9	4.1	

() は各項各府県ごとに実数を小計で割つた百分比。

戻って見ればむつかしい。(曾根崎心中)
 彼奴に逢うてはむつかしと。(冥途の飛脚)
 此の鐘撞くには行法がむつかしい。(博多小女郎波枕)
 人の言草ア、むつかしく。(女殺油地獄)
 姫は「はて、むつかしい事はない」(傾城王生大念仏)
 駒のかしらも見えばこそむつかしゆ成つたと案じける。(山崎与次兵衛寿の門松)
 コリヤ半兵衛。おくとゆつたらむつかしいぞ。(心中宵庚申)
 武兵衛や太左は何とやら小むつかしさにこつそりと(八百屋お七)
 こてこてとむつかしい事は入ぬ(菅原伝授手習鑑)
 此場で殺さば云訊むつかし(仮名手本忠臣蔵)
 夫はきつふ格式の六かしい事を承つたが(幼稚子敵討)

B 近世後期(明和・安永ごろ以降維新まで)

- 何んだか、むつかしそふだね(南閩雑話)
- 疑獄(雑字類編)
- はて、むつかしい事じやナ・是、六ヶしい出入じや差出すと黙つていたがよい(韓人漢文手管始)
- ハメハツシノムツカシキ人(人トモ云)
- カンキ人・四ノ五ノ言(ムツカシクイ)
- コレ今度はむつかしいやつをいふ・ごうぎにむつかしい・むつかしいこたアね・サアはなしこへがやんだからむつかしい・おむつかしがるふといふことをおやかましがるふといふくに

とばなり・おもしろいが、どふも、ふしがむづかしい・やらかしてはにやアならねへといふものだから、むづかしい・エ、むづかしいこたアねへ(東海道中膝栗毛)

六ヶ敷(蘭例節用集)

目をすえてむづかしいかほつきしたる大きなま多ひ・ハ、アむづかしい手になつたナ・よしや姑御がむづかしくても・ヤア／＼むづかしいもんだネエ・鈍岩がはしっこいと来て居るから、どつちもむづかしい・イエ、どうも、まだむづかしう(浮世風呂)あれはそんな六かしい物ぢやアございやせん・なぜ又そんなしよむづかしい事を云つたもんだらう・こんなむづかしく書ずともだの・むづかしい字をしる程損がいくかと思ふよ・むづかしく書と音といふ字だ・むづかしく書くと六百。ソレ見たか是・人も三十越してどうらくになつたのはむづかしいよ・むづかしくいふの辞したなどト・むづかしい戒名を付ると・是でも大勢の客の内にはむづかしい人があるはな・五十を越ちやアむづかしいはな(浮世床)

是もむづかしいことはなけれど・イヤしかし何家業もむづかしくもんだ(春色辰巳園)

イ、エそれでもむづかしいといふ事だから・わるくすると六ツケ敷なるが・どうぞおむづかしくもお逢なさつてくださいまし・久八が宅へ役人衆がござられて、殿の御園へ御立ちゆゑ……と大むづかし・畠山の宝の一行でむづかしいわけになるとの事だそうだ(春色梅見誉美)

意地わるが立戻つて来て何だの角だのとむづかしく・いよ／＼

「むづかる」の項に、十訓抄の句を引いて、「これハ今いふむづかしくに近し」と説明がある。

以上、資料を能う限り年代順に配列してみた。前期には江戸ことばの資料が乏しく、逆に後期には上方ことばの資料が乏しいために、隔靴搔痒の感が強いのであるが、およその傾向はつかめようかと思ふ。後期になつても、並木五瓶(彼は上方から江戸へ移つた作者である。)の「韓人漢文手管始」には、依然「むづかし」が使われており、また月亭可笑の洒落本「角鶏卵」(一七八四年)・山東京伝の同じく「青楼屋之世界錦之裏」(一七九一年)などにも、稀に「むづかし」が見られる。更に十返舎一九の「東海道中膝栗毛」(岩波・古典大系)では、終始一貫して「むづかし」が使われているのが、他の江戸小説群と比べて奇異に思われ、あるいは、一九が二十歳代の七年余りを大阪で送つたことが、その原因の一端であるかも知れない。彼が「膝栗毛」初編を出したのは、帰東後間無しの享和二年である。また、太田全齋の「診苑」・「増補俚言集覽」などの記述をも考慮に入れて、近世語においても、上方語の「ムツカシ」、江戸語の「ムズカシ」という語形の対立は、十分推測されるのではなからうか。

もちろん、上方語においても、「ムツカシ」「ムズカシ」の《ゆれ》のあったことは否定できない。前述の「診苑」にもうかがえるところであり、「蜆縮涼鼓集」にみられる次の濁音化現象は、恐らくこの《ゆれ》があつたであろうこと、傍証となり得るものと考えられる。

いらづる 苛イラツ也

「むづかし」と「むずかし」と

内証むづかしく、借金のみ多くなり、(春色恵の花)お前が其気ならば、何もむづかしいことはなひはネ・大分むづかしくお聞だ子・氣むづかしいお客(春色英対暖語)

ヲヤ偏屈屋とは何処でござりましたっけ子・最むづかしき婦人の人情・ナニむづかしく言たからといつて・今夜何卒温順寐られ・ば宜が、何様もむづかしいもんだ・誰人も六借言わけでもなひのに・峯さんも両女を意地競て察度氣で居ると思はれるから、何れむづかしいのサ子エ(春色梅美婦禮)

さてこの場はむづかしい(高漫齊行脚記)

何もむづかしい事アねへけれども(道中粹語録)

文の末へおさなを書くよふになると、むづかしいね(江戸生艶氣権嬖)

サアむづかしい事をいゝだした(通言総論)

わつちらをよぶにやア、傾城もマアむづかしいのサ(傾城買四十八手)

ふしつけが有ちや、わるふおざんすト是よりむづかしくなる(青楼屋之世界錦之裏)

ヲヤむづかしいものだね・でへぶむづかしいね・三文のくめんもむづかしうござりやす(傾城買二筋道)

六 借下学集日本俗世語也(和漢音釈書言字考節用集・万延元年三刻本)

このほかに、「増補俚言集覽」には「むづかし」の項があり、「むづかし」はその説明文の中にも見当らない。また、「むづかしき講にいらぬがよい(世話尽)」が記載されている。また、

いたづがはし 勞 (注・イタツク)

わだづみ 和田津海 (注・Vadaqu Vmi (日葡))

むくづけし 泉蠢 むくづけ共 (注・Mucutqge, Mucutqgena mono, Mucutqge Votoco (日葡))

ふづう 普通 (注・Futgu, Amanecu tonoru, Futguna fitode nai (日葡))

3

前章で述べたところから推定せられることは、

①近世上方語「ムツカシ」↓現代近畿方言「ムツカシイ」

②近世江戸語「ムズカシ」↓現代東京方言「ムズカシイ」

③④という、歴史的な語形の対立である。

この事から更に敷衍しうることは、共通語の語形に関しては、一応、東京語を基盤とする原則は認めながらも、なお語形に関する歴史的研究と、現状の大規模な組織的な、全国的調査が前提とならねばならないということである。言語の伝統・自然性を無視した語形の統一化は避けられねばならないと思われる。

以上述べたところから、「ムズカシイ」を共通語の語形として確定するのは、現在のところ時期尚早であろうと考えられる。

ここで、現実の問題として、「現代かなづかい」および「当用漢字音訓表」に触れる必要がある。

日常生活の談話では、話しことばの一回性という性質も手伝って、その一語一語の発音にいたるまで意識して話すということは、普通の場合あり得ない。これが一原因となつて、語形意識に《ゆれ》が

生ずるわけであらう。(註五) この事は、逆に聞き手に廻った場合でも同じことが言えるわけで、明らかに際立った発音の特徴以外は、普通意識して聞きとがめないものである。即ちトミヤクム(から)トミヤクム(に)いたる実際の発音には、多くの個人差がありながら、それらは普通、発音の異なりとしては意識されていないのである。

しかしながら、文字言語となると、その事情は異なってくる。「むつかしい」「むずかしい」というかな表記においては、音韻がすでに固定されているため、東京方言圏のものは前者に、近畿方言圏のものは後者に対して、語形上それを素直には受け容れにくい感情が動くのである。(註六) もっとも、「難しい」という表記法があるにしても、「当用漢字音訓表」に従う限り、「難」には「かたい」以外の訓が認められていないため、この語は、かな表記をせざるを得ない。その結果、現状は第二章前半に述べたごとくである。

「ムツカシイ」「ムズカシイ」の《ゆれ》が更に大きくなり、全国的に「ムズカシイ」の優位が実証されるようになるまでは、表記法においても、この《ゆれ》を包んだ一言換えれば、「ムツカシイ」とも「ムズカシイ」とも読むことのできる一表記法を残しておくのがよいのではないかと考えられる。

終りに、調査に当たり御協力をいただいた、浅井輝一・阿頼耶順宏・飯尾和夫・角井義一・川口 恵・左近弘嗣・高向 寧・野井登の諸氏に心から御礼申し上げる。

(註)
一、「言語生活」第百二号(語の《ゆれ》—塚原鉄雄氏)

二、本文中の調査と同時に、次の調査をも対象を同じくして実施

「かつて、ほくは、大津市の高等学校で、生徒を対象に、
《むつかしい》と《むずかしい》との《ゆれ》を調査した。ところが、自分の発音が、そのいずれであるか、答えられないものが、大部分を占めたのである。ラジオや教科書などで、《むずかしい》には、十分になれてはいるはずである。そして、客観的には、《むつかしい》が、圧倒的な地域なのである。しかるに、《むずかしい》が一般的と思しい地域から、転入した生徒を除いて、両者の区別と自己の発音の所属とを、解答し得たも

した。

あなたは、アナウンサーなどの使っている、いわゆる共通語を聞いて、自分もそれが話せたらよいと思いませんか。思う・思わない・わからない

	京 都	滋 賀	大 阪	兵 庫	計
思 う	44 55 (61.1)	50 70 (67.4)	37 64 (64.7)	43 66 (68.6)	429 (65.5)
思 わい	32 20 (32.1)	27 16 (24.2)	25 16 (26.3)	24 8 (20.1)	168 (25.6)
わ かい	7 4 (6.6)	10 5 (8.4)	7 7 (9.0)	8 10 (11.3)	58 (8.9)
小 計	162	178	156	159	655

() は各府県別各項ごとの、および計の百分比。

この調査から、高校生の共通語へのあこがれの強さがわかる。位相差の甚だしい方言圏になれば、この傾向は更に強まるのではないかと想像される。

三、註一の22ページに、次のように論じておられる。

のは、甚だ稀れであった。
四、昭和三十年度国立国語研究所年報7(語形確定のための基礎調査)
五、註一の塚原氏の論文にも触れられている。
六、註四の年報に、これに関連したことが触れられている。
なお、引用出典は、節用集類以外は、左の諸本に拠った。徳川文芸類聚・日本古典全書・日本古典文学大系・岩波文庫

(36・3・29)